

[要旨]

書き換えの干渉 ——文脈作成としての政策、適応、ミステリ——

浜田 明範

人類学において、「文脈」という言葉は、文章上のコンテキストと社会的なコンテキストの両方を指し示すものとして使用されてきた。本稿では、文脈という言葉が持つこの二重性に自覚的に依拠しながら、人類学で社会的文脈と呼ばれてきたものについて考察することを第一の目的とする。より具体的には、ガーナ南部における結核についてフーコーの統治論を発展させながら論じることで、人々の行為を方向づける社会的文脈（＝環境）が、複数のアクターによる文脈作成の結果として生じていることを明らかにし、人類学における新しい文脈観を提起することを目指す。

結核の周囲で最も大規模に文脈作成（＝環境の書き換え）を行っている結核対策プロジェクトは、薬剤やドキュメント、看護師や予算を配置することで、結核菌と患者の行為を統治しようと試みる。他方で、結核菌や患者やその家族は、それぞれの置かれている社会的文脈を書き換えながら、より良い生を模索している。つまり、結核対策プロジェクト、結核菌、患者といったアクターの行為を方向づける社会的文脈は、ひとつのアクターによって決定的に構築されているというよりは、それぞれのアクターによって持続的に書き換えられ続けているのである。

本稿では、このような複数のアクターによる社会的文脈の作成をたどりながら文章上の文脈を作成することで、人類学者の存在と視点が自身が捉えようとする社会的文脈の一部となり、人類学者の作成する文章上の文脈が社会的文脈によって方向付けられているという、人類学者と社会的文脈の相互依存的で動的な関係の一端を描き出していく。